

〔論 説〕

魯迅“生と性”の軌跡

——「長明灯」から「孤独者」、「傷逝」へ⁽¹⁾

湯山トミ子

要旨：魯迅の作品研究においては、作品構成、主題、人物形象、成立背景などから、系統的に比較研究される特定の組み合わせがある。本報告が対象とする「長明灯」(1925年3月、『彷徨』1925年)は改革という主題と狂人という人物形象から「狂人日記」(1918年6月、『呐喊』)と、「孤独者」(1925年10月、『彷徨』)は作品意図、主題、人物形象と作者魯迅の思想的な投影から「洒楼にて」(「在洒楼上」、1924年2月、『彷徨』)と、さらに成立時期と雑誌未発表での刊行、魯迅の愛情、婚姻関係との結びつきから「傷逝」(1925年10月、『彷徨』)との組み合わせで考察されることが多い。本稿では、こうした先行研究での比較考察を踏まえながら、「孤独者」、「傷逝」の考察の起点に「長明灯」を加える。これにより作品に埋め込まれた魯迅の思想形成——自己規定と愛情、婚姻関係に対する選択と決意——の跡を読み解き、その思想的特徴と意義を再考しようとするものである。それは、五四新文化運動期の自己の思想を乗り越え、新たな思想形成に向かう魯迅自身の五四脱却、ポスト五四の思想形成の軌跡であり、26年～27年の南下に向かう思想的、内的準備を意味するものと解釈できる。以上の考察結果により「長明灯」、「孤独者」、「傷逝」の作品解釈に、先行研究とは異なる新たな視点を多少とも加えることができると考える。

1 はじめに——南下の前景

「意は礼教と家族制度の弊害の暴露にある」(“意在暴露家族制度和礼教的弊害”「中国新文学大系小説二」、1935年、「且介亭杂文二集」)と自ら解題した作品、中国初の近代小説となる「狂人日記」(1918年)を発表し

た魯迅は、翌1919年「狂人日記」末尾第13章の「子どもを救い---」（「救救孩子---」）に答えるべく、目覚めた人より子女を儒教倫理の呪縛から解放し、家庭改革を通して「人類の一員」としての「人」の創出をはかるよう呼びかける「我々は今どのように父親となるか」（「我们现在怎样做父亲」1919年10月、『墳』1927年）を発表した。この評論の発表後、間もない1919年12月、魯迅は紹興に残していた母魯瑞と「母の嫁」と称してはばからなかった妻朱安、さらに周作人、周建人一家を招き、北京八道湾での共同生活を始めた。しかし、睦まじきはずの三兄弟とその家族の共同生活は、次弟周作人からの突然の絶縁状により、わずか二年半で瓦解した。1923年8月、郷里に帰らず、ともに生活することを望む朱安とともに、自ら八道湾を出た魯迅は、磚塔胡同に転居し、母を迎える準備を整え、9か月後（1924年5月）、西三条胡同に新居をかまえ、母魯瑞を招き三人の生活を始めた。

五四退潮期にあたる1924年から1925年は、多作期で、『彷徨』（1926年）、『野草』（1927年）に収録される作品など、多くの作品を執筆しているが、五四期の明快な思潮に比して、苦渋と葛藤の色濃い精神世界が繰り広げられている。その葛藤期、まさに魯迅の内心を象徴する題名を冠した作品集『彷徨』の執筆を経て、1926年8月ついに母と妻との生活を捨て、後半生の伴侶となる許広平とともに北京を離れて南下した。北京→廈門→廣州→上海に至る1926年～1927年は、魯迅の人生における前半生と後半生の分岐点であり、魯迅研究上では初期魯迅と後期魯迅を分ける分水嶺である。以下、この南下に向かう魯迅の内的な軌跡を、1925年時期に執筆された「長明灯」から「孤独者」、「傷逝」の内に探り、前半生と後半生を分かち魯迅の“生と性”に根差した思想的転換について、読み解いていきたい。⁽²⁾

1. 「狂人日記」と「長明灯」、「孤独者」と「酒樓にて」

「長明灯」は改革の主題と狂人という人物形象から、しばしば「狂人日記」と比較される。伝統的、封建的な儒教社会の伝統に対する反抗者、狂人という人物形象から見た場合、確かに「長明灯」と「狂人日記」には共通点がある。しかし、狂人の人物形象、自己をとりまく周囲への反抗という行動について、さらに一步踏み込んで比較すれば、「長明灯」の主人公と「孤独者」の主人公魏連父の人物形象には明確な共通性——ともに子孫

を残す祖先祭祀の役割を果たさない男性存在が浮かび上がる。しかも両作品にはともに周囲の縁戚者（叔父）が、粗末な家屋の取得のために、養子縁組を画策するというモチーフが描き込まれ、祖先祭祀という儒教道德の建前、名目に対して、功利的な欲望がうごめく現実の利害が明示されている。しかし祖先祭祀の役割を果たさないという人物形象の基本的特徴を共通にしながら、両作品の基本内容——主題と作品構造には大きな相違が見られる。

1925年3月に執筆を終えた「長明灯」は、結婚せず子孫を残さない男性主人公が、長年村の守り神として祭られてきた土地廟の長明灯を消すことを企て、叔父と村人に捕まえられ幽閉される顛末を軸に展開する物語形式の作品である。

主人公の男性は、村人から「不肖の子孫」（“不肖子孙”）、「こんな子孫」（“这种子孙”）と呼ばれ、さらには“こんな子孫は生かしておけない”とまで言われる。祖先祭祀に背く子孫を残さない男性存在が受ける非難と立場——名目と財産がらみの利害——を通して、祖先祭祀の役割を持つ男性存在の負荷と呪縛、それへの反抗者の姿を描き出している。

一方、「孤独者」では、結婚し、子どもを持つとせず、「西洋かぶれ」（“吃洋教”）の「新党」（“新党”）として、村人から異端者と見なされる主人公魏連殳が、結局、軍閥の顧問職につき、高給を得ながらいわば変節者となり、自暴自棄のすさんだ生活の末に死亡していく顛末を語り手の「私」（“我”）が独白形式でつづる形態をとる。そして「私と魏連殳の出会いを振り返ってみれば、なんとも興味深い、なんと葬式に始まり葬式に終わっているのだ」（“我和魏连殳相是识场，回想起来倒也别致，竟是以送殓始，以送殓终。”）が示すように、祖先祭祀を拒む人物形象としての男性存在を象徴的に示す“死”で始まり、その精神と肉体の消滅までをたどっていく作品である。筋立ての明確な物語構造をもつ「長明灯」が1925年3月の執筆であり、一人の男性の逸話のモノローグ形式をとる「孤独者」の執筆が1925年10月である。結婚により子どもを持つことを拒む男性形象を軸に持つ二作品の作品構造の相違に注目しておきたい。

なお「長明灯」、「孤独者」に先行して執筆された「酒楼にて」（1924年2月）は、“我”の独白を通して友人を語る物語形式、語られる友人呂緯甫と魏連殳の人物形象の類似性により「孤独者」との系統性を指摘されてきた。しかし「酒楼にて」では、結婚により子どもを持つことを拒む人物

形象は、必ずしも構成要素として明確にされていない。

2 「孤独者」——魏連受の人物形象

「孤独者」の作品軸となる主人公魏連受の人物形象については、魯迅自らが「あれは私を書いたのだ」（“那是写我的…”）⁽⁸⁾と語っているだけに、魯迅の自己投影をめぐる考察、解釈、分析をめぐる論考が多い。考察対象としては、反抗者でありながら、最終的に軍閥の顧問として、高給を得る道を選んだ魏連受の、革命者としての挫折感をさぐる視点による分析が多く、作品中で繰り返し語られる①結婚と子ども、叙述量の多い②祖母との関係、葬儀の逸話などについては、必ずしも重視されてこなかった。①は、ともすれば魯迅の子どもに寄せる関心と愛情の深さと、形式的で性的関係を持たなかった妻朱安との子どもものない結婚生活、②は子ども時代に民間故事を語り聞かせてくれ、魯迅が愛情を深く感じていた祖母蔣氏との思い出、その葬儀の様子、状況など、すでに明らかになっている伝記上の事柄であるため、特に踏み込んだ分析が行われていない。しかし、作品の中で主要旋律のように繰り返し語られ続ける①の結婚と子ども、②祖母の葬儀の叙述の意図に一度着目すれば、魯迅がこの作品、及び魏連受の形象に託した自己投影が明確に浮かび上がってくる。

2.1 「孤独者」に描かれた子ども観

魯迅の子ども観を考えると、重要となる幾つかの構成パターンがある。その一つは、男児を重んじる祖先祭祀の流れと男女の性差に関わらず子どもへの平等の愛を示す母性愛の対象としての子ども観、及び両者の対比である。たとえば、先に挙げた「長明灯」には、以下の一節がある。

“六順が息子を生んだら、わしは二番目を奴にやって継がせてもいいと思っているんだ。だが、他人の息子をただでほしい、とは言えない？”

“そりゃだめだ！”三人は異口同音に言った。

“このボロ家は、わしには関係ない、六順もどうでもいいんだ。けどな、腹を痛めた子をただで人にくれるとなれば、母親はすっきりとはいかんだろう。”

（“六顺生了儿子，我想第二个就可以过继给他。但是，——别人的儿子，可以白要的么？”“那不能！”三个人异口同音地说。

“这一间破屋，和我不相干；六顺也不在乎此。可是，将亲生的孩子白白给人，做母亲的怕不能就这么松爽罢？”⁽⁴⁾

息子“儿子”だけが血統を継ぐことができ、祖先祭祀の断絶を免れ得る。必要なのは息子である。しかし、母親の愛の対象には、息子に限らない男女の子どもを示す“孩子”が使用されている。

次に挙げられるのは、社会的存在としての子どもへの視点である。次世代の人間としての子ども、社会を構成する一員としての子どもの存在に対する視点で子どもの社会性を見つめる視点ともいえる。次世代の担い手である子ども、とくに幼い子どもまでが、「食人世界」に取り込まれ、蝕まれていくことに警鐘を発した「狂人日記」の子ども観、目覚めた者から自己の子どもに対して力を尽くして、「理解」し、「指導」し、「解放」し、親子関係から「人類の一員」としての「人」たる子どもを生みだして、社会の変革を求めた「我々は今どのように父親となるか」の子ども観は、社会的、歴史的存在としての子どもに対する視点を示す典型的な言説と位置づけられる。「孤独者」には、魏連父と語り手の“我”との間で子どもの純粋さをめぐる以下のやり取りがある。

「子どもはいつでだってすばらしい。みな純粋で……。」、彼は私がいささか耐えがたく感じているのを察知したようで、ある日、わざわざ機をとらえて私に言った。

「それはそうばかりでもないさ」、私は適当に答えた。

「いや。大人の悪い気性は、子どもにはないんだ。後の悪さは、例えばいつも君が攻撃している悪さは、それは環境が悪く教え込んでしまうんだ。もともとは決して悪くない、純粋で……。私は中国に希望があるとすれば、ただこの一点だけだと思ふね」。「いや、子どものなかに悪い根がなければ、大きくなってどうして悪い実がなるかね？たとえば一粒の種は、まさに、その中に枝、葉、花、実の種があって、大きくなったときに、ようやくこれらのものが出てくる。なにもなくて……、

しかし、魏連受は怒って、じろりと私を見て、もう口を開こうとはしなかった。

私は彼が言いたいことがなくて黙っているのかそれとも相手にしたくないのか、読み取れなかった。しかし、彼が久しく見せたことのない冷ややかな態度を露わにして、黙って続けざまに煙草を二本吸い、さらに三本目を取り出したときには、私は、もう逃げ出すしかなかった。

（「孩子总是好的。他们全是天真……。」他似乎也觉得我有些不耐烦了，有一天特地乘机对我说。

“那也不尽然。”我只是随便回答他。

“不。大人的坏脾气，在孩子们是没有的。后来的坏，如你平日所攻击的坏，那是环境教坏的。原来却并不坏，天真……。我以为中国的可以希望，只在这一点。”“不。如果孩子中没有坏根苗，大起来怎么会有坏花果？譬如一粒种子，正因为内中本含有枝叶花果的胚，长大时才能够发出这些东西来。何尝是无端……。”我因为闲着无事，便也如大人先生们一下野，就要吃素谈禅一样，正在看佛经。佛理自然是并不懂得的，但竟也不自检点，一味任意地说。

然而连受气急了，只看了我一眼，不再开口。我也猜不出他是无话可说呢，还是不屑辩。但见他又显出许久不见的冷冷的态度来，默默地连吸了两枝烟；待到他再取第三枝时，我便只好逃走了。)⁽¹⁵⁾

このやり取りは、子どもの純粹さについて語っているが、その基盤には子どもの社会性をどうとらえるか、社会的存在としての子どものための対照的な視点が盛り込まれている。さらに、魏連受の結婚をめぐる“私”との対話には、以下のように子どもを持たない魏連受が跡継ぎとしての子どもを求めて成立する結婚を拒否する観点が示されている。

「僕は、ちょうど君に知らせようとしていたんだ。君は、ここ何日か、僕のところにたずねて来てはいかん、僕のところには、いやな奴、大きいのが一人と小さいのが一人いて、まるで人間じゃない！」

「大きいのが一人と小さいのが一人、それは誰なんだね？」私は少々いぶかしく思った。

「僕のいとことその息子だ、はっは、息子はおやじそつくりだ」

「町に君を訪ねてきて、ついでにちょっと遊んでいこうということかね」

「いや。僕に相談ごとがあると行ってきたんだが、その子を僕の養子にしようというわけだ」

「え！ 君に養子を？」私は驚かざるを得なかった、「君はまだ結婚もしていないじゃないか？」

「奴らは僕が結婚しないのを知っているんだ。しかもこれはなにも関係ない。……」

(略)

とどのつまり、鍵は、すべて君に子どもがないことにあるんだ。結局、君はどうしたってずっと結婚しないんだね。私はふいに話を振り向けるきっかけを見つけた、やはり長く聞きたいと思っていた話で、この時絶好の機会になったと思った。

（“我正要告诉你呢：你这几天切莫到我寓里来看我了。我的寓里正有很讨厌的一大一小在那里，都不像人！”“一大一小？这是谁呢？”我有些诧异。“是我的堂兄和他的小儿子。哈哈，儿子正如老子一般。”“是上城来看你，带便玩玩的罢？”“不。说是来和我商量，就要将这孩子过继给我的。”“呵！过继给你？”我不禁惊叫了，“你不是还没有娶亲么？”“他们知道我不娶的了。但这都没有什么关系。

……(略)……

总而言之：关键就全在你没有孩子。你究竟为什么老不结婚的呢？”我忽而寻到了转舵的话，也是久已想问的话，觉得这时是最好的机会了。他诧异地看着我，过了一会，眼光便移到他自己的膝髁上去了，于是就吸烟，没有回答。)⁽⁶⁾

最初の引用に示された子どもの純粹さへの讃歌と大人、社会の責任を問う視点と、後継ぎとしての子ども拒否する後の引用により、魏連爰が子ども嫌いではなく、子ども好きでありながら、あえて結婚して子どもを持つことを拒否する人物であることが明示されている。また魏連爰の死後に、大家と子どもとの関係について以下のような一節がある。

「あの方は以前は、子どもたちに対しては、子どもが父親を恐れるよりもっと恐らせていらして、いつも低い声おどおどでしてらした。近頃はそりゃとても変わられて、よくしゃべられるは騒がれるは、私ど

もの人良たちもあの方と遊ぶのが大好きで、ひまがあれば、お部屋に行きました。いろいろなやり方で、からかって遊ばれました。なにか買っていたときには、子どもに犬の鳴き声をまねさせたり、叩頭を一つさせたりなさって。はっは、本当ににぎやかに過ごされて、二か月前にも二良は、靴を買いたくて、叩頭を三つさせられました。それは今も履いていて、やぶれておりませんよ」

（“他先前怕孩子们比孩子们见老子还怕，总是低声下气的。近来可也两样了，能说能闹，我们的大良们也很喜欢和他玩，一有空，便都到他的屋里去。他也用种种方法逗着玩；要他买东西，他就要孩子装一声狗叫，或者磕一个响头。哈哈，真是过得热闹。前两月二良要他买鞋，还磕了三个响头哩，哪，现在还穿着，没有破呢。”⁽⁷⁾）

さらに、結婚せず子どもを持たない魏連受に対して大家在妾をとり子どもを設けることを勧める一段があり、それにより跡継ぎを持つこと、妾を持つことを拒否する魏連受の人物形象がより明確にされている。

あの方はでたらめで、ちっともまじめになさらない。私は気がつきまして、ご忠告もしました。こんなお年になって、結婚なさるべきです。今のご様子からしてみれば、御縁を結ばれるのはたやすい、もしお家柄が釣り合わなければ、さきに何人かお妾さんを買われてもよろしいですし、それらしいご様子をおつくりになられるべきですと。しかしあの方は、ちょっと聞かれると笑いだされて、言いました。「ばあさん、おまえさんは相変らず他人のために、そんなことを心配しているのかね。」ほら、あの方は浮かれておられて、人の話をちゃんとお聞きにならない。もしもっと早く私の話を聞いておられたら、今にお一人でさみしくあの世をさまよわれたりなさって、少なくとも多少は縁者の声をお聞きになれましたのに……。

（“他就是胡闹，不想办一点正经事。我是想到过的，也劝过他。这么年纪了，应该成家；照现在的样子，结一门亲很容易；如果没有门当户对的，先买几个姨太太也可以：人是总应该像个样子的。可是他一听到就笑起来，说道，‘老家伙，你还是总替别人惦记着这等事么？’你看，他近来就浮而不实，不把人的好话当

好话听。要是早听了我的话，现在何至于独自冷冷清清地在阴间摸索，至少，也可以听到几声亲人的哭声……。”)⁽⁸⁾

魏連受が子どもを持つことを拒絶する者として形象化されていることの重要性は、実はこの作品の題目「孤独者」の内にも示されている。「孤独者」という語彙は、中国のみならず、日本語のなかでも常用される近代語彙であるが、源をたどれば、《孟子》梁惠上章句下五「老いて妻無きを“鰥”といい、老いて夫無きを“寡”といい、老いて子無きを“独”といい、幼くして父無きを“孤”といい（“老而无妻曰鰥，老而无夫曰寡，老而无子曰独，幼而无父曰孤”），すなわち“鰥寡孤独”である。「孤独者」という語彙は単独で一人で孤立した存在を示すのみならず、子、孫などが係累ない父系と男性系譜からの脱落者を示すのである。この意味をくみ取るとき、「孤独者」の主人公である魏連受の人物形象を構成する「孤独」が、単なる社会的に孤立した、愛情関係を持たない人間存在を意味するだけのものではないことが読み取れる。「孤独者」の、魏連受もまた「長明灯」の主人公と同じく、子孫を残すことを求められても受け入れない“鰥寡孤独”の「孤独者」の形象なのである。

2.2 祖母の逸話——祖母蔣氏と魯迅の女性観の形成

「孤独者」の作品には二人の祖母が登場する。一人は、魯迅自身の祖母蔣氏がモデルであると推察されている主人公魏連受の祖母、もう一人が物語の語り手“我”に、軍閥の顧問となり羽振りを利かせながら自暴自棄の生活の果てにあっけなく病死する魏連受の最後を語り伝える大家——大良の祖母である。後者、すなわち魏連受の人物形象を伝える語り部的な大良の祖母の役割は、それなりに明確だが、前者魏連受の祖母の人物形象、あるいは作品世界での役割は、具体的にはどのように解釈され、意義づけられるのであろうか？ 育ててもらった恩義と、孤独な生き様に愛情を尽くす魏連受の人物、祖母以外に係累がない家族関係、葬式での号泣の逸話により、特異な性格を示す意図のためだけに構成されたのであろうか？ あるいは先行研究でたびたび言及されるように、後妻として嫁いだ夫との不仲を抱えながらも、ユーモアにたけ（“幽默、善诙谐”）⁽⁹⁾、若い孫たちには民間故事を語り聞かせてくれたやさしい祖母への哀惜であろうか？ 5章からなる「孤独者」の作品世界を構成する主要な二つのモチーフ、①結

婚と子ども、②祖母をめぐるプロットが意味するものはなにか、作品構成上の意図、意味を再考する必要があるのではないか？ 特に、魏連殳の祖母の存在は、祖母蔣氏をモデルとしていたことだけを指摘するだけでは、解明しきれない内容、意図、意義を持つものと推察される。より端的に言えば、祖母蔣氏の生きざま——“生と性”のあり方が、魯迅の女性観、男性としての在り方に与えた影響に注目することにより、その意義の一端がはっきりと読み解かれてくると考える。

2.2.1 祖母蔣氏・祖父周福清⁽¹⁰⁾

祖母蔣氏は、魯迅の父伯宜公と娘徳を生んだ先妻孫氏が亡くなった後、周福清（介孚公）の後妻として嫁ぎ、娘康を生んだものの、大福清とは生涯にわたり夫婦仲が悪く、不和が続き、女性としての愛情を満たされることなく一生を終えている。その要因として、結婚前に太平天国の乱の際にさらわれ失踪していたために、夫福清から太平天国軍の女を意味する“长妈妈！”と擲掄を浴びせられ、屈辱的な罵辞に涙していた事件があり、それが、夫婦不仲の根深いしこりになっていたといわれる⁽¹¹⁾。さらに、魯迅一族400年の歴史中、初めて翰林入りしただけに、剛毅、強直な性格で、正義感が強く、権威を恐れず、齒に衣を着せぬ言動で物議を引き起こすことも少なくなかった。初の任地の江西省の知県職では、清廉官ゆえに疎まれ、「愚鈍で任に堪えない官」との冤罪を受け、弾劾、罷免されている。この江西県に見習いとして同行した一族の末裔周觀魚（周冠五）は、その回憶録で、この弾劾事件の告発理由に、妾との会話を立ち聞きしていた蔣氏と福清の実母戴氏に対して、「馬鹿者！」（“王八蛋！”）と罵声を浴びせたことが、日ごろ福清が口にしていた「めくら太后、馬鹿皇帝」（“昏太后、呆皇帝”）の大不敬（“大不敬”）に、「大不孝」（“大不孝”）の罪状を上乗せすることになり、弾劾に至ったと記している⁽¹²⁾。史実的には、知県としての清廉モットーの官僚ぶりと、利を求める周囲との利害関係に根差す原因がっているものであるが、この初任地での弾劾罷免事件以後、周福清が地方官僚になることはなく、北京で買官により官位の低い臚録職（内閣中書漢票簽所）に就き、実母戴氏の死により、服喪のため官を辞するまで、北京で妾と生活し、任地に蔣氏を伴うことはなかった。都合12年務めた職場は、「暇な役所の暇な役人」と言われる閑職であったが、勤勉さと事務処理能力に好評価を得ている。しかし、ただでさえ薄給の京官の半分の

給与に甘んじる候補時代が長く、同郷の李慈銘の『越縵堂日記』（1886年8月25日）には、ひどく貧しくて焚く飯がなくなった福清のために、友人から米を200斤（120kg）を借りてやったという記載があり、逼迫した生活ぶりがかがえる⁽¹³⁾。候補から正官に昇進して三年後、北京での官僚生活がようやく落ち着きだしたのも束の間、母戴氏が逝去し、服喪のため辞職して帰郷するめぐりあわせとなる。おりしも殿試同期の考官が郷試験に派遣されて来るとの情報により、長年郷試に合格できず、アヘンに染まる生活に陥る兆しを見せていた息子伯宜公、親戚・知人5人の師弟の合格を依頼する考官買収を諮った不正事件の犯人として摘発された。科挙不正事件が横行した清末期、ほとんど露見することのないもっとも成功率の高いはずの考官買収が未遂で露見し、検挙されるという事件であっただけに全国で風評が立ち、科挙不正を戒める恰好の事件と見なされ、欽案事件として審議され、死刑の判決を受けて（未決死刑囚斬監候）杭州の獄に下った。魯迅が『呐喊』自序のなかで語った一家の没落の起点となる魯迅9歳の時の変事の直接の原因である。死刑という厳罰ながら、「思いつきによる単独犯」という罪状は、地方の名士を巻き込む連座を避けたい地方政府の思惑と、軽微な事件に厳罰を下し戒めの効果を挙げたい皇帝側の意向、福清一人の反抗として息子伯宜公に後を託して周家の災いを減ずる、いわば四方に利となる裁定であった。⁽¹⁴⁾しかし、魯迅が『呐喊』自序で述べたように、魯迅は質屋と薬屋通いのなかで没落子弟としての辛酸をなめ、「世間の人の本当の顔を見る」（“大概可以看见世人的真面目”）「屈辱の体験」を受け、父は自らを「バカ子孫、バカ子孫」（“呆子孫！、呆子孫！”）と自虐的にののしりながら⁽¹⁵⁾、自責と失意の内に死去した。その結果、少年期の魯迅と母魯瑞に一家を支える責務が残されたのであった。長男として母魯瑞を助ける魯迅ら家族の下に、恩赦を受けて周福清が二番目の妾との間に生まれた孫魯迅よりも若い末息子伯昇を伴い戻ってきたのは、下獄から7年後のことだった。蔣氏は、妻妾同居でさらに7年を過ごすことになった。⁽¹⁶⁾「孤独者」のなかで、紹興で、蚕が自ら繭を作りわが身を閉じ込めることから、閉塞的な自己を生み出す、孤独の人を示す“独头茧”の語を用いて、「あなたは本当に自分自身で、孤独の繭者紡ぎ出しているんだ」（“你实在亲手造了独头茧”）⁽¹⁷⁾、「その糸はどこから来たのか——もちろん、世の中にはそんな人がいる、たとえば私の祖母がそうだ、私は彼女と血を分けていないが、ひょっとすると彼女の血を引き継いでいるのかもしれない

い。」（“那丝是怎么来的？——自然，世上也尽有这样的人，譬如，我的祖母就是。我虽然没有分得她的血液，却也许会继承她的运命。”）⁽¹⁷⁾、「自ら孤独を作り出している、しかし口のなかでは人の一生をかみしめている。しかもこんなふうに感じている人はやはりとても多いのだ」（“将自己裹在里面了。亲手造成孤独，又放在嘴里去咀嚼的人的一生。而且觉得这样的人还很多哩”）⁽¹⁸⁾と語る作中の祖母のモデルというべき祖母蔣氏の人生の根源に、損なわれ、癒されることなく、自らの運命を甘受して、人生を引き受ける女性としての存在があったことに注目しておきたい。⁽¹⁹⁾

2.2.2 鲁迅と祖父周福清

周福清の生涯は、まさに紹興の名士周一族に栄光と屈辱の二つの頂点をもたらした。孫たちの教育に対する独自の考え方、開明的、民主的な思想性を示す逸話も少なくないが、酒もたばこも阿片も吸わぬ生真面目な性格ながら、後妻蔣氏のほかに延べ三人の妾をかかえ、鲁迅よりも三才下の息子を持つなどの諸行は、幼い時代には同情を、成人後の近代的な人権、女性観を受容した新世代の知識人たる鲁迅にとっては、封建的な旧社会の男性による女性抑圧の典型として、非難と批判を余儀なくさせるものにはならなかった。特に、幼い時に民間故事を語り聞かせてくれた慈愛あふれる祖母蔣氏を幸せにするどころか生涯苦しめた悪しき夫たる祖父福清の存在は、鲁迅にとりわけ強い抵抗感、嫌悪感を引き起こしていたと思わせる。たとえば、伯官公が亡くなったとき、別れに際して、周福清が残した連句「世に苦しき者は孤児、お前が突然妻のもとに馳せるとは思いもよらず、にわかに悟なり、もし地下で母に会えば、我が教育致らず、深く遺言に背いたり」（“世間苦孤兒，誰料你遽跑去妻孥，頓成大覺，地下若逢爾母，未道，我不能教養，深負遺言”）に対して、鲁迅ら孫達が死者を鞭打つ、として非難を向けていたこと⁽²⁰⁾、また周福清自身の辞世の句「死して知あれば、地下で多くの骨肉にまみえん。生きて補わざるなきを願う、世にいつ綱常は立ちうるのか！」（“死若有知，地下相逢多骨肉。生愿无不补，世问何世时立刚纲常！”）に対して、鲁迅が「人をののしるものだ」（“是骂人的”）と評していたという。⁽²¹⁾ さらにその死に際して、本来周家智興房の後継者たる鲁迅は留学中の日本から帰国せず、葬儀を取り仕切らなかった。そしてさらに謎に包まれているとともに、より鮮烈な感情を伝えているのが、鲁迅一家が紹興を引き上げる際、立ち会った周建人が何度も止め、「ずっ

と死ぬ前の日まで書いていたんだ」（“他一直记到临终前一天”）と知らせるにも関わらず「今回帰ってきてなんでかめくってみたが、たいした意味がない、妾を買ったとか、妾同士のけんかだの、なんの意味もない」（“我这次回来翻了翻，好像没有多大意思，犯了写了买姨太太呀，姨太太之间吵架呀，有什么意思？”）、と生涯記し続けた大量の日記を、魯迅が強引に焼却してしまったことである。⁽²²⁾ それにより科挙不正未遂事件の顛末は永久に不明になった。この不正事件について、蔣氏は、死ぬ前に伝えておきたいことがあるとして、福清が考官にわいろを届けに行っておらず、事件発覚後、「百草園」の小屋に隠れていた、自分が食事を届けたと語っていたという。⁽²³⁾ 蔣氏は、福清亡き後、正妻として若い妾を自由の身にするなど、女性としてなお夫であった福清に対して、儒教社会の求める古き女性の役割を誠実に果たしていた様子も伝えられている。

2.3 畜妾による男性性の加害者性と女性観、結婚観の形成と呪縛

以上述べてきたように、夫との不仲、妻妾の不和が絶えなかったという蔣氏の女性としての生きざまは、魯迅の男性観、女性観に大きな影響を与えたと推察される。特に、祖母蔣氏を苦しめた男性の畜妾に対する嫌悪感は、男性が女性にもたらす加害者性として、とりわけ強く意識され、批判と拒絶の思考をはぐくんだものと考えられる。「随感録」40、「我々は今日のように父親となるか」など、五四時期の婚姻、家庭論で、畜妾を強く批判する言説を唱えているのは、五四の儒教道徳批判、男性偏重の二重道徳批判に対する賛同にとどまらぬ魯迅自身の内面にはぐくまれていた強い意志を示すものと見なせる。しかし、そうであればあるほど、自らが「母亲娶媳婦」として引き受けた旧式結婚の枷、妻朱安との婚姻関係、性愛なき夫婦関係に拘束された魯迅自身の男性としての在り方に与えた影響、性的抑圧の発生に注目せざるを得ない。特に1923年の周作人との不和により、八道湾を出て、朱安と二人だけで暮らした9か月、さらに母魯瑞を加えた三人の生活が与えた抑圧は大きい。1925年の趙其文宛ての手紙には、以下の一節がある。

感謝は、言うまでもなく、どういう面からみてもまず美德ということになるでしょう。しかし、私は、いつもこれは人を拘束するものだと思います。たとえば私は時々、冒険したり、破壊したくてたま

らなくなります。でも、私には母がいて、私を多少とも愛しており、私の平安を願っています。私は彼女の愛に感謝するために、自分のやりたいようにやれず、北京でわずかばかりの糊口を求めて、灰色の生活を送るしかないのです。人に感謝するために、人を慰められず、またしばしば自分——少なくとも一部分を犠牲にしたりするのです。

（“感激、那不待言，无论从那一方面说起来，大概总算是美德罢。但我总觉得这是束缚人的。譬如，我有时很想冒险，破坏，几乎忍不住，而我有一个母亲，还有些爱我，愿我平安，我因为感激他的爱，只能不照自己所愿意做的做，而在北京寻一点糊口的小生计，度灰色的生涯。因为感激别人，就不能不慰安别人，也往往牺牲了自己，——至少是一部分”）⁽²⁴⁾

上記の引用が示すように、感謝と灰色の北京生活への思いは、そうした内面の葛藤をよく示している。性愛の面では、1919年の「我々は今どのように父親となるか」では、「他国の昔のことについてだけ言っても、スペンサーは結婚したことがなかったが、落胆してさみしく過ごしたとも聞かないし、ワットが早くに子女を亡くしても天寿をまっとうして安らかに死んだという」（“单就别国的往时而言，斯宾塞未曾结婚，不闻他侪倖似无聊；瓦特早没有了子女，也居然寿终正寝”）⁽²⁵⁾として、独身であること、子どもを持たないことに、こだわらない楽観的な姿勢を示している。しかし、1925年の「寡婦主義」（1925年11月23日、『墳』）には、以下のような一段がある。

やむなく独身生活を送っている者は、男女を問わず、精神にいつも異常をきたすことを免れず、執拗で猜疑心が強く、陰険な性質の者が多い。ヨーロッパの中世の騎士、日本の維新前の御殿女中（宮女）、中国歴代の宦官、その冷酷さ、陰険さは、通常の者の何倍も上まわっている。他の独身者も同じで、生活が自然に逆らっているから、心はいつも大いに変わってしまっていて、世の中のことがみなつまらなく、人間がみな憎く、天真爛漫に楽しんでいる人を見れば、憎しみがわく。とりわけ、性欲を抑圧しているがゆえに、他人の性的な事件に敏感で、疑い深く、うらやみ、そのために嫉妬する。その実、これも成り行きとして当然のことである。社会に迫られ、表面上は純潔をよそわざる

をえないが、しかし内心は本能の制御から逃れられず、思わず欠乏感がうごめくのである。(下線湯山、以下同様)

(至于因为不得已而过着独身生活者，则无论男女，精神上常不免发生变化，有着执拗猜疑阴险的性质者居多。欧洲中世的教士，日本维新前的御殿女中（女内侍），中国历代的宦官，那冷酷险狠，都超出常人许多倍。别的独身者也一样，生活既不合自然，心状也就大变，觉得世事都无味，人物都可憎，看见有些天真欢乐的人，便生恨恶。尤其是因为压抑性欲之故，所以于别人的性底事件就敏感，多疑；欣羨，因而妒嫉。其实这也是势所必至的事：为社会所逼迫，表面上固不能不装作纯洁，但内心却终于逃不掉本能之力的牵掣，不自主地蠢动着缺憾之感的。)⁽²⁶⁾

独身者には性的抑圧とそれによる歪みがあるという発言は、独身者を自認する⁽²⁷⁾ 魯迅の自閉的な婚姻生活の抑圧が、すでにその存在を脅かすものになっていたこと、そしてそれを公言できる状態になっていたことを示している。その背景に魯迅と許広平の出会い、恋があったことは言をまつまい。

2.4 難解な一段

「孤独者」には、しばしば論議を呼び、解釈の争点となってきた以下の一段がある。

「君はあるいは僕を少しは知りたいと思うかもしれない、今いっそのこと君に話してしまおう：僕は失敗したんだ。以前、僕は自分が失敗者であると思っていた、が今では決してそうではない、今こそ真の失敗者になったんだ。以前、僕に何口か生きてほしいと願った人がいて、僕自身もな何日か生きたかったが、生き続けられなかった。今はほとんどその必要なくなってしまったのに生き続けたいと思ひ……。」「しかしそれでも生き続けたい？」

「僕を何日か生きながらえさせたいと願った人は、自分が生き続けられなくなった。この人はすでに敵に誘い出されて殺された。誰が殺したのか？誰も知らない。人生の変化はなんて早いのか！ この半年、僕はほとんど乞食同然だった。実際にもうに乞食になっていたんだ。

しかるに僕にはまだすることがあった、僕はそのためにこれを求め、そのために凍え、そのためにさみしくなり、そのために苦勞した。しかし、滅亡は望んでなかった。そう、僕に何日か生きながらえることを願った人がいて、その力はこんなにも大きかった。しかし今ではなくなってしまった、その一人もいなくなってしまった。同時に、僕は自分も生き続けなくなった、ほかの人は？ 同じなんだ。同時に僕自身も僕が生き続けることを願わない人のためにしゃにむに生き続けなくなったし、僕にしっかり生き続けることを願った人はもういなくなってしまう、もう誰も心を痛めない。このように人を傷めることは、僕は願わない。しかし今はなくなってしまった。その一人もいなくなってしまった。楽しくてたまらない、気持ちよくてたまらないんだ。僕はすでに僕が以前憎んでいたものにお辞儀し、すべてに反対し、僕が以前あがめていたもの、主張していた一切を退けた。僕はすでに本当に失敗していたんだ、しかし僕は勝利したんだ。

（“你或者愿意知道些我的消息，现在简直告诉你罢：我失败了。先前，我自以为是失败者，现在知道那并不，现在才真是失败者了。先前，还有人愿意我活几天，我自己也还想活几天的时候，活不下去；现在，大可以无须了，然而要活下去……。”“然而就活下去么？”

“愿意我活几天的，自己就活不下去。这人已被敌人诱杀了。谁杀的呢？谁也不知道。“人生的变化多么迅速呵！这半年来，我几乎求乞了，实际，也可以算得已经求乞。然而我还有所为，我愿意为此求乞，为此冻饿，为此寂寞，为此辛苦。但灭亡是不愿意的。你看，有一个愿意我活几天的，那力量就这么大。然而现在是没有了，连这一个也没有了。同时，我自己也觉得不配活下去；别人呢？也不配的。同时，我自己又觉得偏要为不愿意我活下去的人们而活下去；好在愿意我好好地活下去的已经没有了，再没有谁痛心。使这样的人痛心，我是不愿意的。然而现在是没有了，连这一个也没有了。快活极了，舒服极了；”我已经躬行我先前所憎恶，所反对的一切，拒斥我先前所崇拜，所主张的一切了。我已经真的失败，——然而我胜利了。”⁽²⁸⁾

上記引用文中では、「僕を何日か生きながらえさせたいと願った人は、自分が生き続けられなくなった。」（“愿意我活几天的，自己就活不下去。”）それが誰であるのか、あるいは「この人はすでに敵に誘い出されて殺され

た。誰が殺したのか？」（“这人已被敌人诱杀了。谁杀的呢？”）をめぐる論議が注目されてきた。“革命家”を示す林菲、許広平論を提起する李允经、魯迅の信条を示すとする陳焯、杜国景らの論点を挙げた上で、林敏潔は、魯迅による作品講義を受けた増田渉のテキスト本に「lover」（原文二重線の箇所“有一个”）の書き込みがあったことを明示し、新たな論議を提起している。⁽²⁹⁾ この一段を理解する上でたいへん有力な手がかりの提起である。特に、先に述べたように、1925年3月に知り合い、相互の感情が確認されるに至っている許広平の存在が魯迅の“生と性”を考える時に、直接的で、きわめて重要な影響をもつことを示唆する点で大変重要であると思われる。ただ筆者は、それでもこの一段を明確な論旨によりすべて整合性をもつ文脈として、筋道立てることは大変難しいと考える。というより、この一段は本来的にそうした脈絡の整合性を取りえぬ不整脈を編み込んで、意図的に記されたものであると考える。整合性を明晰にせず、あえて多様な解釈の可能性により、真意を奥に閉じ込める手法は、「鑄劍」（1927年4月、『故事新編』1936年）の挿入歌にも見られる。ここでは、意図的に整合性をもたせない叙述法により文意を明示せず、あえて真意を覆い隠し、読み手に読み取らせない手法をとっていると思われる。その手法を受け止めた上で、全体としての文意をたどるとき、水脈のなかから浮かび上がるのは、主人公魏連受の生と死によって提示される生き方、信条——跡継ぎを残すための結婚、性愛の拒否——の顛末である。一步踏み込んで言えば、魏連受の死により葬られたもの——性を否定する生の在り方、であると考え。それを生み出した要因として、増田渉のテキストに書き込まれた性愛の訪れ「lover」をとらえることはそれほどむずかしい解釈ではない。「lover」が許広平の存在を示唆するものであることも容易に推察される。それは、性を否定する生の在り方を選びとってきた魯迅の人生の在り方について、「僕はすでに本当に失敗していたんだ、しかし僕は勝利したんだ」（“我已经真的失败，——然而我胜利了。”）と言わしめたとの解釈を読み出すことができる。この解釈に立つとき、先に挙げた二つのモチーフ、①結婚と子ども、②祖母をめぐるプロットの意味、祖母の死により始まり、魏連受の死により終わる「孤独者」の物語展開の意味も明確になる。言い換えれば、祖母の生き方を通して、魯迅が自らの内にはぐくんだ愛情観、結婚観、旧式結婚の呪縛を引き受け、男性としての自己の性を圧殺してきた魯迅の“生と性”の古い自己規定を葬り、新たな道に転換し

ていくために、祖母蔣氏を描くことは不可欠の要素であったと考えるのである。

「それは君が間違っている。人はその実このようではなかった。君は実際には“孤独の繭”を自分で自分のなかに押し込めた。君は世の中を少しは明るく見るべきだ。私はため息まじりに説いた。

(略)

彼女の晩年は、僕が思うに、結局それほど苦勞なく、寿命も長かった。僕は泣くには及ばなかった。しかも泣く人は多いじゃないか？以前彼女を懸命に欺いた人でも泣く、少なくとも顔つきだけは悲しんでいる。はは！……しかし僕はその時どうしてだか、彼女の一生が目の前に浮かんできた、自ら孤独を紡ぎだし、また口の中でかみしめた人の一生が。しかもそんな人はやはり多いんだ。こうした人は、僕を辛くさせるが、しかし多くは僕がその時あまりに感情的になって……」。

(那你可错误了。人们其实并不这样。你实在亲手造了独头茧将自己裹在里面了。你应该将世间看得光明些。”我叹惜着说。(略)

“她的晩年，据我想，是总算不很辛苦的，享寿也不小了，正无须我来下泪。况且哭的人不是多着么？连先前竭力欺凌她的人们也哭，至少是脸上很惨然。哈哈！……可是我那时不知怎地，将她的一生缩在眼前了，亲手造成孤独，又放在嘴里去咀嚼的人的一生。而且觉得这样的人还很多哩。这些人们，就使我要痛哭，但大半也还是因为我那时太过于感情用事……。”⁽³⁰⁾

祖母には息子がいない。語り手の「私」に、作品冒頭で、「私と魏連殳の出会いを振り返ってみれば、なんとも興味深い、なんとも葬式に始まり葬式に終わっているのだ」（“我和魏連殳相是识场，回想起来倒也别致，竟是以送視殮始，以送殮终。”）と述べさせているように、子孫を持たない二人は同じ運命を持つ者として「死」で結ばれている。

しかし、魯迅自身が実際に新たな性愛を引き受けていくにはもう一つの関門を越えなければならなかった。それが旧式結婚、そしてその相手である妻朱安への別れの宣言である。

3 「傷逝」の特徴

「傷逝」は「孤独者」に3日遅れて完成されたが、「孤独者」同様、雑誌などの刊行物に掲載されず、直接『彷徨』に収められた。“我”によって語られる形態をとり、魯迅自身の内的世界の投影を読み取るなど、作者研究が多い「孤独者」に対して、「傷逝」は動的劇的な筋立てが明確な物語世界を展開するだけに、作者魯迅の投影論だけでなく、新時代の恋愛、自由恋愛というテーマや思想的課題、視点を加えるなど、作品の主題、意図、分析内容にも幾分か広がりがある。しかし、この作品を恋愛小説と考えた場合、非常に大きな特徴がある。それは、この小説の主題が、若き青年男女の同棲破綻の顛末を描いたものでありながら、精神面での葛藤、亀裂のみを対象として、肉体的な性愛の葛藤、亀裂がまったく描かれていないのである。少年少女の精神的な恋愛であればともかく、同棲している青年男女の恋愛の破綻顛末に肉体を伴う性愛の描写がまったく存在しないことは奇妙である。同棲生活を支えるために必要な経済的問題が描かれながら、共に暮らす青年男女の恋愛の末に当然起こるべき肉体的な性愛の分裂、葛藤がない、より端的に言えば、「傷逝」は性なき顛末で終束する恋愛小説、性愛の欠落した恋愛小説といわざるを得ない一面をもっている。

二人の男女の葛藤、亀裂は、精神的、知的な交流を求め、これを期待していた男性が、日々の家事の切り盛りに明け暮れる女性に失望し、愛情を失い、別れの宣告へと歩む顛末は、性愛なき生活と日々の暮らしの世話、それは魯迅と朱安が送った結婚生活に重なりあう。1924年周作人との不和により、八道湾を出る際、魯迅が朱安にその後の希望を聞いたとき、朱安は、以下のように答えている。

「僕はしばらく磚塔胡同に移ることにする。君は八道湾に残るか、それとも紹興の実家に帰るかね？もし紹興の実家に戻るのであれば、毎月君に生活費を送る」、朱安は少し考えてから深い思いを込めて答えた。「八道湾には、私は住めません、あなたが引っ越していければ、お母様は遅かれ早かれ、あなたについて行かれるでしょう。私が一人で、^{いもうと}義妹さん、姪御さん、甥御さんといっしょに過ごして、なんになるでしょう？さらに申し上げればお姉さんは日本人で、話もわかりませんから、暮らしづらいです。紹興の実家にも行きたくありません。

あなたが磚塔胡同にお引越しになれば、どのみちあなたに代わってご飯をつくったり、縫い物、洗濯、掃除をしたりすることが必要です、こうしたことならできますし、私はあなたと一緒にいきたいと思いません。…

（“我决定暂时搬到砖塔胡同。你是留在八道湾，还是绍兴娘家去？如果回绍兴，就按月给您寄去生活费用。”朱安略加考虑，频有深情地回答说：“八道湾我不能住，因为您搬出，娘娘（绍兴称婆婆为娘娘）迟早也要跟您去的，我独个人跟着叔婶侄儿侄女过，算什么呢？再说婶婶是口木人，话都听不懂，日子不好过呵。绍兴娘家我也不想去，您搬砖塔胡同，横竖您要替你烧饭、缝补、洗衣、扫地的、这些是可以做，我想和你一起搬去”……）⁽³¹⁾

朱安はまた言った、

「以前、大先生と私はうまくいっておりませんでした、私がすっかり彼にお仕えし、すべて彼にしたがっていけば、将来はきっとよくなるはずだと思いました。」彼女はまた一つのたとえを取り出して、「私はちょうど一匹のカタツムリのように、塀の下から一步步づつ這い上がっていく、這うのは遅いが、いつかきっと塀の頂上に上れる口がくる。けど、今私は方法がなくなってしまいました、もう這い上る力がなくなってしまいました。私が彼を待っていればよくなるというのは無駄なんです。彼女は、こうしたことを話して、心がすっかり萎えてしまったようだ。彼女は続けて、「どうやら私の一生はお母様お一人にお仕えするしかありません、万一お母様が「お亡くなりになれば」、大先生のお人柄から見て、私の以後の生活は彼が見て下さるはずです。」

（“过去大先生和我不好，我想好好地服侍他，一切顺着他，将来总会好的”。她又给打了一个比方说：“我好比是一只蜗牛，从墙底一点一点往上爬，怕得虽慢，总有一天会爬到墙顶的。可是现在我没有办法了，我没有力气爬了。我待他再好。也是无用。”她说这些话时，神情十分沮丧。她接着说：看来我这一辈子只好服侍娘娘（太师母）一个人了，万一娘娘‘归了西天’从大先生一向为人看，我以后的生活他是会关的。）⁽³²⁾

朱安の立場からすれば、せめて魯迅の身の回りの世話をすることにより、自らの居場所、夫魯迅との関係を生みだしたいと思う切実な願い、正妻としての身分にすぎがゆえの選択であったのであろう。

しかし、最終的に魯迅は、「傷逝」で主人公涓生自らの行為に対して抱く後悔と自責の思いをすべて飲み込み、すべて承知しながら、自らの性を否定した生の生き方を捨て、性の復権による新たな生の道を求めていく。旧式な婚姻生活の破綻から、新たな男女の愛の創造に向かう魯迅の道は、新時代の愛の崩壊により、旧式の男女の生活に舞い戻る「傷逝」の物語展開と時間軸が逆転している。破たんが新生活への起点である。それは「孤独者」の先に挙げた難解な一段の一節にあった「僕はすでに本当は失敗していたんだ、しかし僕は勝利したんだ」（“我已经真的失败，——然而我胜利了。”）に該当するものと言えよう。

終わりに

『呐喊』から『彷徨』へと続く作品集に描きこまれた人物形象は、次第に魯迅自身の“生と性”の葛藤を反映していく。1925年3月1日脱稿の「長明灯」から、1925年10月17日脱稿の「孤独者」、4日遅れの21日脱稿の「傷逝」への展開には、とりわけ魯迅の“生と性”の葛藤から新たな決意への軌跡が映し出されていると考える。物語形式の「長明灯」の主人公“他”としか呼ばれない男性形象が、独白形式の「孤独者」の魏連受に転じていく過程は、まさに魯迅が後半生の伴侶許広平との出会いのなかで、自らの“生と性”をつむぎだしていく過程を明快に描き出している。両作品は明快であり、あまりに濃厚な自己投影を埋め込んでいるがゆえに、あえて刊行物への発表を避け、作品集に直接盛り込んだのであろう。いずれにしても映し出される“生と性”の軌跡には、翌26年から27年にかけての南下に向かう脈々たる愛の地下水脈、後半生の魯迅の在り方を育む土壌の礎が築かれつつあったと考えられる。本稿では、「孤独者」を核とする考察に終わったが、魯迅の思想形成を理解する上で、『呐喊』、『彷徨』の作品群、『野草』を含めて、そこに織り込まれた魯迅の男性性のあり方、展開について、さらに考察を進める必要があると思う。

注

- (1) 本稿は『国際鲁迅研究会第四回学術論壇：ソウル—麗水論壇』、2013年6月15日に予定していた報告の日本語原文に一部加筆を加えたものである。本論壇の当日の報告用に準備していたが、一身上の都合により参加できなかったため、同大会論文集（pp389～405）には、当該中国語論文のみ収録されている。
- (2) 鲁迅の愛情と南下問題については、「愛と復讐の新伝説“鑄劍”——鲁迅的“性の復権”と“生の定義”」、『成蹊法学』65号、2007年、pp21～41、参照
- (3) 胡风：『鲁迅先生』、『胡风全集』湖北人民出版社、1999年、p65
- (4) 「長明灯」、『呐喊』、『鲁迅全集』、人民文学出版社、1985年版、第2巻、p64
訳はすべて1985版による拙訳、以下同様。
- (5) 「孤独者」、『呐喊』、『鲁迅全集』、人民文学出版社、第2巻、p91
- (6) 同上、pp92～93
- (7) 同上、p106
- (8) 同上、pp106～107
- (9) 周冠五『鲁迅家庭家族和当年绍兴民俗・鲁迅堂叔周冠五回忆鲁迅全编』、上海文化出版社、2006年、p20
- (10) 鲁迅の祖父周福清及び祖母蒋氏については、注9周冠五『鲁迅家庭家族和当年绍兴民俗・鲁迅堂叔周冠五回忆鲁迅全编』、陳雲坡『鲁迅の家乗及其轍事』未刊行（北京図書館収蔵、1958年）、周建人口述、周晔編述『鲁迅故家的敗落』、湖南人民出版社1984年、周作人『鲁迅的故家』、人民出版社、1953年、馬蹄疾『鲁迅生活中的女性』、知識出版社、1996年、『鲁迅生平史料汇编』第1巻、天津人民出版社、1981年、筆者『鲁迅の祖父周福清試論：事蹟とその人物論をめぐって』（1）、（2）、『猫頭鷹』第6号（1987年）・第7号（1990年）参照
- (11) 周作人『知堂回想録』、三育図書出版公司、1980年、p67
- (12) 注（9）周冠五『鲁迅家庭家族和当年绍兴民俗・鲁迅堂叔周冠五回忆鲁迅全编』、p15
- (13) 李慈銘『越縕堂日記』、文海出版社、1962年、第15冊、光緒12年8月25日、p8862
- (14) 詳細は注（10）筆者『鲁迅の祖父周福清試論：事蹟とその人物論をめぐって』（1）、（2）参照
- (15) 注（10）周建人『鲁迅故家的敗落』、p118
- (16) 鲁迅の祖父周福清の晩年の状況は、注（10）周建人『鲁迅故家的敗落』参照。
- (17) 注（5）『孤独者』p96
- (18) 同上、p98
- (19) 注（10）馬蹄疾『鲁迅生活中的女性』、pp7～10、馬蹄疾は祖母蒋氏が鲁迅の思想、性格、創作に与えた影響を重視している。

- (20) 注(10) 周冠五『鲁迅家庭家族和当年绍兴民俗・鲁迅堂叔周冠五回忆鲁迅全编』、p15
- (21) 注10 周建人『鲁迅故家的败落』、pp218～2198
- (22) 同上、p11
- (23) 同上、pp282～283
- (24) 1925年4月11日 趙其文宛て書簡 [250411]、『鲁迅全集』第11卷、p442
- (25) 「我们现在怎样做父亲」、『鲁迅全集』第1卷、p138
- (26) 「寡婦主義」、『墳』、『鲁迅全集』第1卷、p264
- (27) 魯迅の教え子であった孫伏園は、西三条胡堂で魯迅が寒い北京の生活のなかで、魯迅が朱安に作らせた縮入れズボンを着用しようとしないう魯迅と交わした会話で、魯迅が「独身の生活は、常々安逸な方から発想してはならないのです。」（“一个独身的生活，决不能常往安逸方面着想的。”）と述べたことを記すとともに、「彼は家庭にありながら、生活ぶりは完全に独身者であった」（“他虽然处在家庭中，过的生活却完全是一个独身者。”）であったと記している。孫伏園「哭魯迅先生」、『魯迅先生二、三事』、『魯迅回忆录专书』上册、魯迅博物館、魯迅研究室（魯迅研究月刊）选編 北京出版社 1999年、p73
- (28) 注5『孤独者』、pp92～93
- (29) 林敏浩「“新”資料増田涉注譯本《吶喊》《彷徨》研究之可能性—以魯迅小説《孤独者》注释“lover”为例」。林論文は「孤独者」と「傷逝」の執筆時期を逆転した上で、「傷逝」の主人公子君を評広平ととらえる見解を提示している。ここで挙げられている論文は、林非「中国现代小说史上的魯迅」陝西人民教育出版社、1996年；李允经『魯迅情感世界：婚恋生活及其投影』、北京工业大学出版社、1996年、陈焯、杜国景度「双重孤独的纽带—魏连受之缺席婚恋浅谈过」
- (30) 注5「孤独者」、pp92～93
- (31) 俞芳「封建婚姻の犠牲者…魯迅先生和朱夫人」、『我记忆中的魯迅先生』、浙江人民出版社、1981年、pp139～140
- (32) 同上、p142